



Title	韓国語流音の音声学的調査に関する論考
Author(s)	韓, 喜善
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2026, 2025, p. 23-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106304
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

韓国語流音の音声学的調査に関する論考

韓 喜善

要旨 韓国語の流音は単一の音素であるが、音環境に応じて多様な音声として実現されることが知られている。しかし、その実態を客観的・定量的な手法によって検討した研究は必ずしも多くない。本稿は、韓国語流音に関する音声学的研究の現状を整理し、今後の課題を明確にすることを目的とする。古代韓国語の時代以来、流音がどのような音声として記述・解釈されてきたのかについて、通時的な観点から概観するとともに、地域差にも触れる。さらに、調音音声学、音響音声学、知覚実験の各研究を整理し、韓国語流音に関する音声学的研究の現在地と今後の課題について考察する。

1 はじめに

韓国語の流音の音素は一つ (/l/) であり、語頭、母音間、語末に加え、重子音（語末/l/+頭子音/l/）など様々な音環境に現れるが、音環境によってその音声が変わることが指摘されている（Lee 1999 など）。さらに、それぞれの音環境における音声についても研究者の間で見解が異なる。これは、韓国の流音が音声の多様性に富むと捉えることができる一方、その音声の実態が不明であるということも示している。

韓国語の流音の音声の実態を明らかにするためには、客観的・定量的な手法での立証が不可欠である。しかし、現状において韓国語の流音について客観的・定量的な手法を用いた調音音声学的検討は少なく、十分な知見が得られていない。本稿では、流音の音価についてこれまでどのような記述や見解があり、どのような調査が行われているか、主要な文献を中心に、韓国語流音の音価に関する記述、解釈、見解、実験結果を取り上げて、韓国語流音の音声研究の現状や課題について述べる。

2 韓国語流音の通時的な視点

2.1 古代韓国語

Lee and Ramsay (2011)では、古代韓国語の表記資料からかつて韓国語に2種類の流音が存在した可能性が論じられている。古代の韓国語資料（7世紀末の郷歌『慕竹旨郎歌』）では、後の韓国語のハングルにおけるㄹに対応する位置に、尸と乙という2つの異なる表記が用いられている。これらは単なる表記上の揺れではなく、互いに置き換え可能ではなかったことから、何らかの音韻的区別を反映していたと考えられる。その一方で、Lee and Ramsay (前掲)は古代韓国語に2種類の流音が存在した可能性は高いと考えているものの、それらが具体的にどのような音価を持っていたのか、例えば側面音と弾き音の対立であったのか、あるいは別の種類の流音の対立であったのかについては断定できないとも述べ、さらに、この流音の統合は、韓国語史全体に見られる音韻変化の流れの中で理解すべきであると述べている。すなわち、『慕竹旨郎歌』は古代韓国語に2種類の流音が存在した可能性を示す有力な証拠ではあるが、その具体的な音声の実態については未解明の部分が残されていることを指摘しているとともに、韓国語

では子音の閉鎖の度合いを強める方向への変化が認められており、流音の統合もそのような音韻変化の一環として位置づけられる可能性があるとしている。

2.2 中世韓国語

中世における韓国語流音の音価に関しては、ハングルの創製について記述した「訓民正音解例本(1446)」によると、ㄷに関しては、下記のように記述されている(ㄷ 2004、趙 2010)¹⁾。

ㄷ 半舌音 如閤字初發聲

これは「ㄷは半舌音で『閤』の字の初めに発する音と同じである」のように訳することができる。ここで、半舌音とは、現代の言語学でいうところの流音に当たる。元の中国音韻字では、中国語音の[l] (齒茎側面接近音) を指す用語である。一方、ハングルにおいて流音を表す字母にはㄷの他、ㄴという字母も用意されており、訓民正音解例本によると以下のように記されている。

半舌有輕重二音。然韻書字母唯一。且國語雖不分輕重。皆得成音。

若欲備用。則依唇輕例。ㅇ連書ㄷ下。為半舌輕音。舌乍附上腭。

これを訳すると、「半舌音(流音)には軽音と重音の2つの音がある。しかし、中国の韻書の字母(中国音韻学の字母)ではそれらを表す字母は1つしかない。また、国語(韓国語)では軽音と重音を区別しないが、どちらも発音することができる。もし両者を区別して表す必要があるならば、唇軽音の例に倣い、ㅇをㄷの下に添えて書き、それを半舌軽音とする。その発音は、舌が一瞬上顎に触れさせるものである。」と訳することができる。このように「半舌軽音」は、弾き音として解釈され、中世の韓国語の頃より流音が様々な音声で調音されていたことを示唆している²⁾。

2.3 現代韓国語における地域差

(1) 小倉進平による方言研究に見られる流音(小倉 1920, 1923, 1924, 1929, 1930)

20世紀前半における韓国語の語頭流音の音声については、小倉進平による見解に注目できる。たとえば、朝鮮半島北西部の平安北道における流音はソウル方言と異なると記されている。/lja/、/ljo/、/ljo/、/lju/のように流音に口蓋化を伴う母音が後続する場合、ソウル方言では[ja]、[jo]、[jo]、[ju]と発音されるが、平安北道では[na]、[no]、[no]、[nu]と発音するという。流音に母音/i/が後続する場合(/li/)については、ソウル方言では[i]と発音するが、平安北道では流音を明確に発音することが多いという。また、咸鏡道(朝鮮半島北東部)の語頭流音については、/la/、/lja/、/lo/、/ljo/、/li/では流音を明確に発音するが、

1) ㄷの字母は、『訓民正音』によれば半舌音を表す字母である。その字形は舌の形を象ったものとされるが、基本字母であるㄱに加画を施して作られたものであり、その加画が調音上の違いを表しているわけではない。

2) 実際にㄴが使用された例はなく、ㄷのみが使われてきたことを考慮すれば、ㄴはあくまで音素的な表記として、ㄷは流音の軽重を兼ねる音素表記として、この2つの字母の担う役割に違いは明確である。

/lo/, /ljo/, /lu/, /lju/ではソウル方言と同様に発音 ([no], [jo], [nu], [ju]) されるという。一方、朝鮮半島の南西に位置する済州島では、流音の音声はソウル方言と同様、頭音法則が適応されており、違いはないとしている。このように、当時の日本支配下における朝鮮半島では、地域ごとに語頭流音に対して頭音法則が適応される度合や音環境による音声の違いがあったことを示している。現在の北朝鮮にあたる地域では、現在の韓国にあたる地域に比べて語頭流音が明確に発音される傾向があったと解釈できる。

(2) 北朝鮮の流音

現代の韓国語では、外来語の輸入に伴い、外来語を中心に語頭でも流音を発音しており、頭音法則が適用されない場合が見られるようになった。著者の内省では、現代における韓国語母語話者は語頭で流音を発音するのに困難さや抵抗を感じていないが、伝統的な慣習として漢字語では頭音法則を適用した形で語頭流音は省いて表記し、発音しないというのが標準的な発音であると考えられる。一方、南北分断以前は朝鮮半島全域で頭音法則が適用されていたが、分断以降、北朝鮮では語頭流音を表記する方針が変わった。たとえば、강・김・김 (1996)では北朝鮮の文化語（標準語）の音声について、語頭の音環境でも流音を明確に発音することを推奨する記述が見られる。

해방이전까지만하여도 조선말에서는 단어의 첫소리로서 [ㄷ]가 발음되지 않았다. 이것은 조선어고유단어의 첫소리로서 [ㄷ]가 없는것과도 관련되어있다. 그러나 그후 단어의 첫소리로서 [ㄷ]가 발음되기 시작하고 그 방향으로 발전하여 나가기때문에 지난날 지속해오던 낡은 발음관습을 극복하는것이 중요하게 제기된다. (강・김・김 1996: p. 61)

(解放以前までは、朝鮮語では単語の語頭において [ㄷ] は発音されなかった。これは、朝鮮語の固有語において語頭に [ㄷ] をもつ語が存在しなかったこととも関係している。しかし、その後は単語の語頭でも [ㄷ] が発音されるようになり、その方向へと発音が発展してきたため、従来から続いてきた古い発音習慣を克服することが重要な課題となっている。)

このように、北朝鮮の言語政策のもとで頭音法則を意図的に排除しようとした結果、韓国と北朝鮮とで流音の発音の違いが発生した可能性が考えられる。

また、流音には様々な発音の仕方が可能であることもあり、調音の仕方に違いがある可能性も考えられる。たとえば、Yun and Kang (2019)は、朝鮮半島北東部の咸鏡道方言話者（韓国在住の35名）とソウル方言話者（20名）を対象に、漢字語³⁾、外来語を含む41語の語頭流音の発音について調査した結果、両地域とも多様な音声 ([ɾ, ɹ, r, l, n, tʰ]) が現れ、両地域とも[r]の音声の頻度が高いものの、それぞれの音声の分布は異なると報告している。また、それぞれの地域において年齢差が認められたと報告している。具体的にはソウル方言の若年層では[r]が増えており、咸鏡道方言の若年層では[r]が減っているとしている。このように、韓国と北朝鮮（あるいは北東部の方言）との比較研究はまだ限られており、今後さらなる音声学的検討が期待される。

3) 漢字語の表記については、語頭流音の音声を収録するために、韓国語母語話者に対しても北朝鮮による正書法で漢字語のテスト語を表示している。

3 現代韓国語における流音の音声学的調査

3.1 韓国語における流音の多様性

IPA Handbook (1999: p. 197)所収の Lee による韓国語子音表では、韓国語の流音は側面接近音 ([ɺ]) と提示されている。Lee は音環境によって流音の音声が変わることにも言及しているが、韓国語の流音を代表する音声は[ɺ]であるという見解が示されている。この見解については、後述のように流音の音声表記について研究者によって見解が一致していないため、さらなる検討の余地がある。以下、語頭、母音間、語末に加え、重子音の各音環境における韓国語の流音の音声について、先行研究でどのような見解が示され、調査が行われてきたかを検討する。

語頭における流音の音声については、上記の側面接近音[ɺ] (Lee 1999、Lee et al. 2015) の他、[ɾ] (우메다 1983、이 1996、Lee et al. 2023)、[ɺ]であるという見解 (野間 2007) がある。語中の母音間における流音については、多くの研究 (우메다 1983、이 1996、Lee 1999、Kim 2000、Lee et al. 2023 など) において[ɾ]であるという見解が示されているが、他方で[ɺ]という見解もみられる (野間 2007)。語末については、従来より[ɺ] (이 1996、Lee 1999) と[ɺ] (우메다 1983、野間 2007) という2つの見解がある。重子音の音環境については、Lee (IPA Handbook 1999: p. 201) が隣接する母音により[ɺ]あるいは[ɺɺ]にもなると述べている。

以上のように、韓国語の流音の音声の実態については、音環境ごとに検証することが課題であるが、韓国語の流音の音声学的調査においては研究者の内省によるものがほとんどであるため、調音音声学的手法を用いて韓国語の流音の音声の実態を客観的・定量的に実証していく必要がある。

3.2 母音、個人差、年齢差の影響

音環境や地域差の他、韓国語の流音の音声については、以下3点の注目すべき指摘がある。1つ目は、後続する母音によって子音の調音が変化するという指摘 (우메다 1983、이 1996) である。이 (1996)では、非口蓋化音の母音が後続する場合は[ɺ]、口蓋化音が後続する場合は[ɺʲ]と記載している。また、音節末の流音は、先行する母音によって調音が変化する (우메다 1983) という指摘もある。Hwang et al. (2019)は、語末の音環境 (/tal, pul, pol, tɐl, eil/) において/i/が先行する場合、子音の調音時においても前舌が盛り上がるため、そり舌音を作るのに十分な空間がなく、その結果そり舌は形成されにくいと報告している。2つ目に、個人差 (Hwang et al. 2019) だけでなく、個人の中でも複数の流音の音声を観察される (이 1996) という指摘もある。3つ目は年齢差である (野間 2007、Yun and Kang 2019)。野間 (2007) は、「若い層ではそり舌は少ないようである」と指摘している。

3.3 調音音声学的検討

調音音声学的調査の場合、一般的に音声提供者への心身の負担が大きく、安全性、人権問題、そして費用の問題が関わるため、データの収集は困難であるとされてきた。現状において、韓国語の流音について客観的・定量的な手法を用いた調音音声学的検討として、被験者の心身への侵襲性がない、あるいは低いとされる MRI (Magnetic Resonance Imaging: 磁気共鳴画像)、EMA (Electromagnetic Articulography:

電磁式調音運動計測)、EPG (Electropalatography : 電気口蓋図法)、超音波による調査がいくつか報告されている。

まず、語頭流音については、MRI による調査がある。Lee et al. (2015)ではソウル方言話者男性2名(年齢不記載)を対象に語頭流音を調査したところ、歯茎側面接近音[l]であったと報告している。韓 (2025)もソウル方言話者女性2名(40代、20代)を対象に調査を行ったが、語頭流音はそれぞれ話者1では[l](有声歯茎側面接近音)、話者2では[l̥](有声後部歯茎そり舌側面接近音)という結果であった。この違いが年齢差によるものか、個人差によるものかは不明であるが、舌先の接触時間が長いという特徴については共通している。語中の母音間の流音については、Kim (2000)と Ahn (2002)の EPG による調査(Kim 2000 : ソウル方言話者2名、Ahn 2002 : ソウル方言話者30代男性1名)およびLee et al. (2023)のEMAによる調査(ソウル方言話者20代男女12名)では[r]と示している。語末の流音については、Ahn (2002)の EPG による調査では [l]、Hwang et al. (2019)の3次元の超音波を用いた調査(ソウル方言話者の20代女性5名)では[l]と[l̥]として調音が行われていると報告している。

いずれの音環境においても「3.1」で示した研究者の見解を支持するものであるが、テスト語、年齢、性別、地域などの要因についての課題は残されており、データを積み重ねて流音の全体像を明確にしておく必要がある。

3.4 音響音声学的検討

音響音声学的調査に関しては、語頭流音について調査した下記の3つの文献に注目できる。まず、Jo (2015)の調査では、13名(ソウル方言、20-30代男女)を対象に、有意味語36語計465発話をデータとして語頭流音の音声を調べた。その結果、[l]が57%、[r]が31%、[r̥]が3%、が[r̥]9%であったと報告している。Yun and Kang (2019)でも語頭流音は多様な音声として生成されるとしているが、[r̥]は最も頻度が高く生成されるという点では Jo (2015)と一致していない。Crosby and Dalola (2021)では、12名の話者(40歳未満のソウル方言話者、男女各6名)による語頭流音の音声を「弾き音」か「側面音」かの2つに分類した方式で検討し、[l]に比べて[r̥]の方のほうが多く現れた([r̥]:69%、[l]:31%)と報告している。Jo (2015)と Yun and Kang (2019)においては、語頭流音は様々な音声として現れることが報告されており、Crosby and Dalola (前掲)のような単純な処理については懸念がある。音響的手法を用いて具体的に音声を特定していく場合、様々な音響的特徴を計量し、計測値に対して基準を定めて音声を定義していくのはしばしば容易ではない。流音の音声の実態は、音響分析単独では解明が困難であり、調音音声学的手法を採用した調査と補完し合う形で検討していく必要があると考える。

3.5 知覚判断による検討

韓国語の流音の音声の実態に関しては、知覚実験を採用した調査は管見の及ぶ限りでは見当たらない。そのため、著者は現在、新たな手法を用いた調査に取り組んでおり、以下その途中経過の概略を報告する。

本実験では、Arai(2013)による日本語の流音に関する調査(実験1)を参考に、様々な音声として生成された韓国語流音([l, ɭ, r, ɭ, r, ɭ, l, ɭ]および語頭では[n]も含む)を刺激音として用い、音声の「自然さ」の判定実験を実施した。

音環境は、語頭/la/、語中の母音間/ala/、後末/al/であり、著者の音声を収録した。音響分析、聴覚印象からIPAの調音位置、調音様式が確認できる音声を刺激音として採用した。刺激音は、音環境ごとに分けてランダム配列した。

実験参加者は、首都圏出身の29名(女性15名、男性14名)の韓国語母語話者である。参加者の年齢は19～58歳(19歳1名、20代10名、30代3名、40代12名、50代3名)である。実験参加者には、音声を聞き、韓国語の標準語としての自然さを「非常に自然」「やや自然」「中程度の自然」「やや不自然」「非常に不自然」の選択肢から自然度を選択するよう指示した。「中程度の自然さ」は、「よくわからない」という意図ではないことも説明した。実験形式はネットから参加可能な形で実施し、静かな部屋でヘッドフォンを装着の上、参加するよう求めた。音声は、実験参加者が納得が行くまで繰り返し聞くことが可能で、所用時間は言語背景調査も含め、約1時間以内であった。

各刺激音に対して実験参加者が「非常に自然」と回答した割合をもとに、語頭と語中の母音間それぞれについて報告する。語頭では[r]が37%、[ɭ]が33%、[l]が30%で他より高く、様々な調音様式、子音の長さを持つ流音が自然と判断されていた。流音の自然性判断には幅があり、絶対的に優勢な音声はない様子であった。語中の母音間では子音部の長さが短い音声支持される([r]、[ɭ]、[r])傾向があった。特に、[r]は57%という高い支持を得た。一方、[l]、[ɭ]、[r]のように、子音が長く生成される性質を持つ接近音は、全く支持されなかった。

今後、参加者を増やすとともに語末の分析と合わせ、生成実験(リアルタイムMRIによる調音音声学的不検討、音響分析)の結果と合わせて韓国語流音の全体像を明らかにしていきたい。

4 今後の流音研究の課題

韓国語の流音研究における現在の課題は、その実態を客観的・定量的な手法によって検討した研究が少ないという点である。そのため、「調音音声学」「音響分析」「知覚実験」を組み合わせる総合的な検討に加え、「音韻論」の視点も取り入れて言語間に共通する一般性と韓国語に固有の個別性の両面から様々な言語における流音(小林2005、松本1998、Labrune2021)について、複数の流音を弁別する言語との比較を通して流音そのものについての知見を深めていく必要がある。また、成人の流音の音声的特徴を理解する上では、子どもの流音獲得過程に着目するアプローチ(召・성2020)も有効であると考えられる。その一方で、韓国語の流音が音環境によって異なる音声として実現される要因を明らかにするためには、韓国語の音韻・音声体系の特徴にも目を配りつつその検討を進めていく必要がある。さらに、年齢差(野間2007、Yun and Kang2019)、場面差(ㅇ1996)、発話速度(Derrick and Gick2021)、地域差(Yun and Kang2019)、性差(Yun and Kang2019)など流音の音声の変化に影響すると考えられる複数の要因についても調査するとともに、データを蓄積して韓国語の流音の全体像を明らかにしていくことが今後の課題となる。

引用文献

【日本語の文献】

- 小倉進平 (1920) 『朝鮮語学史』 大阪屋號書店.
- 小倉進平 (1923) 『国語及朝鮮語発音概説』 近沢印刷所出版部.
- 小倉進平 (1924) 『南部朝鮮の方言』 朝鮮史学会.
- 小倉進平 (1929) 『平安南北道の方言』 京城帝國大學編.
- 小倉進平 (1930) 『咸鏡南道及び黄海道方言』 京城帝國大學編.
- 小林正憲 (2005) 「流音について-R と L の言語学-」 『四天王寺国際仏教大学紀要』 (40), 149-169.
- 趙義成 (2010) 『訓民正音』 平凡社.
- 野間秀樹 (2007) 「音声学からの接近」 『韓国語教育論講座』 第1巻, くろしお出版.
- 韓喜善 (2025) 「リアルタイム MRI を用いた韓国語首都圏方言話者による語頭流音の調音音声学的検討」 『音声研究』 29, 27-40.
- 松本克己 (1998) 「流音のタイプとその地理的分布—日本語ラ行子音の人類言語史的背景—」 『一般言語学論叢』 (1), 1-48.

【韓国語の文献】

- 강진철·김성근·김수길 (1996) 海外우리語文学研究叢書 98 조선어 실험음성학 연구, 한국문화사.[Kang, J., Kim, S., & Kim, S. (1996) *Studies in Experimental Phonetics of Korean*. Overseas Korean Language and Literature Research Series 98, Seoul: Hangeuk Munhwasa.]
- 김인경·성철재 (2020) 아동의 유음 /ㄹ/에 대한 지각 및 산출 연구, 언어학 86, 51-73. [Kim, I., & Seong, C. (2020) "A perception and production study of /ㄹ/ in children's utterance," Korean Journal of Linguistics 86, 51-73.]
- 우메다히로유키 (1983) 『韓国語의 音声学的 研究—日本語와의 対照를 中心으로—』 蜚雪出版社.
[Umeda, H. (1983) *A Phonetic Study of Korean: A Comparison with Japanese*, Seoul: Hyungseol Publishing.]
- 이상혁 (2004) 훈민정음과 국어 연구, 도서출판 역락. [Lee, S. H. (2004) *Studies on Hunminjeongeum and the Korean Language*, Yeokrak.]
- 이호영 (1996) 국어 음성학, 태학사. [Lee, H. (1996) *Korean Phonetics*, Seoul: Taehaksa.]
- 조남민 (2015) 어두 유음의 음성적 실현에 관한 연구—인접 모음과의 상관성을 중심으로—, 언어과학연구 75, 289-310. [Cho, N. (2015) "A Study on the Phonetic Realization of Word-initial Liquids in Korean: Focusing on the Correlation with Adjacent Vowels," *The Journal of Linguistic Science* 75, 289-310.]

【英語の文献】

- Ahn, M. (2002) "An Acoustic Study of the word-final Lateral Approximant in Korea," *Language Research* 53(2), 231-245.
- Arai, H. (2013) "On Why Japanese /r/ Sounds are Difficult for Children to Acquire," *Proceedings of INTERSPEECH*, 2445-2449.
- Crosby, D., & Dalola, A. (2021) "phonetic variation in Korean liquid phoneme," *Proceedings of the Linguistic Society of America* 6(1), 701-712

- Derrick, D., & Gick, B. (2021) "Gait change in tongue movement," *Scientific Reports* 11(1), 16565.
- Hwang, Y., Sherman, C., & Lulich, S. M. (2019) "Articulatory characteristics and variation of Korean laterals," *Phonetics and Speech Sciences* 11(1), 19–27.
- Kim, D. (2000) "Context-sensitive lingual gestures in the Korean tap/r," *Speech Sciences* 7(3), 11–19.
- Labrune, L. (2021) "Word-initial rhotic avoidance: A typological survey," *Glossa: A Journal of General Linguistics*, 6(1), 1–19.
- Ladefoged, P. (2005) *A Course in Phonetics* (5th ed.). Thomson Wadsworth.
- Lee, H. (1999) "Korean" In International Phonetic Association (ed.) *Handbook of the International Phonetic Association: A Guide to the Use of the International Phonetic Alphabet*, 197–201. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Lee, J., Kim, S., & Cho, T. (2023) "Intergestural CV timing of homophonous words with different morphological structures: A case study of liquid/l in Korean," *Proceedings of the 20th International Congress of Phonetic Sciences*, 2125-2129.
- Lee, K., & Ramsey, S. R. (2011) *A History of the Korean Language*. Cambridge University Press.
- Lee, Y., Goldstein, L., & Narayanan, S. (2015) "Systematic variation in the articulation of the Korean liquid across prosodic positions," *Proceedings of the 18th International Congress of Phonetic Sciences*.
- Yun, S., & Kang, Y. (2019) "Variation of the word-initial liquid in North and South Korean dialects under contact," *Journal of Phonetics* 77, 100918.